

社会的逸脱行為の促進・抑制要因としての 恥意識に関する基礎的検討

中 村 真*

要 約

本稿は、恥意識が社会的逸脱行為に対して促進・抑制の両面にわたって影響を及ぼすことを首都圏の四年制大学に通う学生を対象とする質問紙調査を行って実証的に検討した。先行研究の知見をふまえて、自分の行動が自ら立てた目標や基準に合致しないときに生じる「自分恥」、および、自分の行動が社会一般の常識やルールと一致しないときに生起する「他人恥」が社会的逸脱行為に対する許容性を抑制すること、自分の考えや行動が身近な仲間集団と一致しないときに生じる「仲間恥」が社会的逸脱行為に対する許容性を促進するという仮説を設定し、これらを概ね支持する結果を得た。また、「仲間恥」が社会的逸脱行為を促進する背景に、規範意識の低い仲間との同調傾向があることを裏付ける因果モデルの検証をパス解析により行った。

キーワード：恥意識、社会的逸脱行為、自分恥、他人恥、仲間恥、仲間集団の規範意識、集団同一視

問題・目的

筆者を含む共同研究グループは、一連の調査研究（中里・松井，1999；2003；2007；中里ら，2003；中里ら，2005；松井・中里・片山・中村・堀内，2005 など）を通じて、恥意識が自らを省みたときに生じる「自分恥」、自分の行動が社会一般の常識やルールと一致しないときに感じる「他人恥」、身近な仲間集団と自らの考えや行動とのあいだにズレが生じたときに感じる「仲間恥」から成ること、そして、「自分恥」と「他人恥」が青少年の非行的態度を抑制する強力な要因であることを見出した。一方、中村・松井・堀内・石井（2010）は、「仲間恥」には弱いながらも非行的態度を促進する傾向があり、その背景要因として、思春期・青年期に特有の心性である大人社会が作り出した社会規範への反発心と、それを共有

する身近な仲間集団への同調傾向があるのではないかという点を指摘している。

本研究では、先行研究で示された青少年における恥意識と非行的態度の関連を大学生の社会的逸脱行為に対する許容性に援用して、自分恥と他人恥がこれらの行為に対しても抑制的に影響し（仮説1）、規範意識の低い仲間集団に同一視している者においては仲間恥が社会的逸脱行為に対して促進的な影響を及ぼす（仮説2）かどうかを検討する。大学生を対象とする質問紙調査を行ってこれらの仮説を検証した。これにより、恥意識が社会的態度の促進・抑制要因としてどのように機能するのかを検討するうえで必要とされる基礎的資料の収集を試みる。

方 法

調査対象者・調査日時

首都圏の四年制大学に通う学生 235 名（男性 85 名、女性 150 名、平均年齢 19.29 歳、SD 1.37）

2017 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

を対象に2010年7月に質問紙調査を実施した。

調査内容

質問紙の構成は以下の通りであった。

1. フェイス・シート

所属学部・学科、学年、年齢、性別を尋ねた。

2. 恥意識尺度

中里・松井(2007)などを参考にして作成した「親しい仲間たちと趣味や好みが合わなかったとき」「自分で決めたことを守れなかったとき」など32項目を使用し、それぞれの場面に対する恥ずかしさの程度を尋ねた。各項目について、調査対象者自身にあてはまる程度を「全く恥ずかしくない(1)」「恥ずかしくない(2)」「あまり恥ずかしくない(3)」「すこし恥ずかしい(4)」「恥ずかしい(5)」「とても恥ずかしい(6)」の中から1つ選択してもらう6件法で回答を求めた。なお、集計・分析に

あたっては、各選択肢の()内の数値をそれが選択された場合の得点として用いた。以下の3~5の各尺度についても同様である。ただし、逆転項目については、変換処理を行ったうえで用いた。

3. 社会的逸脱行為の許容性

「してはいけない箇所に落書きをする」など7つの社会的逸脱行為に対する許容性の程度を尋ねた。それぞれの項目について、調査対象者自身にあてはまると思う程度を「非常に悪いことだ(1)」「悪いことだ(2)」「やや悪いことだ(3)」「あまり悪いことではない(4)」「悪いことではない(5)」「まったく悪いことではない(6)」の中から1つ選択してもらう6件法で尋ねた。質問項目は、表1に記載した通りである。

4. 仲間集団の規範意識の低さ

身近な仲間集団の社会規範の水準を把握するた

表1 分析に用いた質問項目

仲間集団の規範意識 (11項目, $\alpha=.81$)

授業中に携帯電話を使用する

授業中に授業の内容とは関係のない私語を交わす

ほぼ満席状態であっても、出席するの可否か定かではない仲間のために席を確保する

欠席している仲間のために授業の配付資料を実際に必要な枚数よりも多めに確保する

授業中の教室に遅れて入室した場合であっても、仲間を見かけたら声をかける

授業に遅れたり、途中退室する

授業中に、教員に隠れてスナック菓子などを食べる

授業中に、漫画、雑誌、小説などを読む

授業の出欠確認の際に、欠席している仲間を装って代わりに返事をする

電車内で大声で会話する

道幅いっぱい広がって歩く

仲間集団への同一視 (11項目, $\alpha=.89$)

親しい仲間(たち)の存在が私を支えてくれる

私は親しい仲間(たち)のメンバーであることを誇りに思っている

親しい仲間(たち)のメンバーであることは、私にとって重要なことだ

親しい仲間(たち)と一緒にいると安心できる

親しい仲間(たち)の行動や考え方は、私に強く影響している

親しい仲間(たち)に強い親近感を感じる

私が自分の考えをまとめたり、行動の指針を決定する際には、親しい仲間(たち)の意見を参考にする

私は親しい仲間(たち)に受け入れられていると思う

親しい仲間(たち)と同じ考え方や行動をしたい

親しい仲間(たち)のメンバーであることが周囲の私への評価を高めてくれる

親しい仲間(たち)のメンバーであることは、他の人の目に映る私のイメージを決定する重要な部分である

社会的逸脱行為に対する許容性 (7項目, $\alpha=.75$)

電車やバスにただ乗りする(不正乗車, キセル)

してはいけない箇所に落書きをする

駅のホームで並んで待っている人たちの列に割り込む

図書館で借りた本を期日までに返さない

コンパの席で飲めない人に酒をすすめる

自分の家のお金や物を黙って使ったり持ち出す(自分の所持金, 所有物を除く)

駐輪禁止区域に自転車やバイクを止める

めに、「授業中に教員に隠れてスナック菓子などを食べる」など11項目について仲間たちに当てはまる程度を尋ねた。それぞれの項目について、調査対象者の身近な仲間たちにあてはまると思う程度を「全くしない(1)」「めったにしない(2)」「あまりしない(3)」「たまにする(4)」「よくする(5)」「かなりよくする(6)」の中から1つ選択してもらう6件法で尋ねた。つまり、得点が高いほど、仲間集団の規範意識が低いことを示す。質問項目は、表1に記載した通りである。

5. 仲間集団への同一視

「親しい仲間たちに強い親近感を感じる」など、集団アイデンティティを測定する11項目を尋ねた。それぞれの項目について、調査対象者自身にあてはまると思う程度を「全くあてはまらない(1)」「あてはまらない(2)」「あまりあてはまらない(3)」「ややあてはまる(4)」「あてはまる(5)」「よくあてはまる(6)」の中から1つ選択してもらう6件法で尋ねた。質問項目は、表1に記載した通りである。

調査手続き

調査は、講義時間中に集団配布集団回収方式で行った。なお、調査に先立ち、回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報の開示されないことを説明し、同意を得たうえで実施した。

結果

1. 基本統計と性差の分析

基本統計を算出するにあたり、まず、各尺度の信頼性分析を行った。ただし、恥意識尺度については、因子分析を行い、その結果に基づき尺度を再構成したうえで信頼性分析を行った。

① 恥意識尺度の尺度構成と信頼性分析

まず、恥意識尺度32項目について因子分析(重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)を行った。2つ以上の因子にまたがって因子負荷量が高い項目、および、いずれの因子にも高い負荷量を示さない項目を除きながら繰り返し分析を行い、固有値1以上の基準で3因子を抽出した。

各因子は、因子負荷量が.340以上の項目群によって構成されているとみなして解釈を行った。

第1因子は、「努力が足りなくて目標が達成できなかったとき」など、自分の行動が自ら立てた目標や基準に合致しないときに生じる13項目で構成されており、先行研究に準じて「自分恥」とした。

第2因子は、「親しい仲間たちと趣味や好みが含まなかったとき」など、自分の考えや行動が身近な仲間集団と一致しないときに生じる8項目で構成されており、「仲間恥」とした。

第3因子は、「お祝いや式典で自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき」など、自分の行動が社会一般の常識やルールと一致しないときに生じる8項目で構成されており、「他人恥」とした。

尺度の信頼性分析を行ったところ、 α 係数は「自分恥」が.86、「仲間恥」が.85、そして「他人恥」が.74であった。いずれも高い値を示したので次元性があるとみなし、それぞれ1項目あたりの平均値を算出して以降の分析に用いた。表2に恥意識尺度の因子分析結果を示した。

② 他の変数の信頼性分析

各変数の信頼性分析を行った結果は以下の通りであった。まず、「社会的逸脱行為に対する許容性」の程度を測定した7項目の α 係数は、.75であった。次に、「身近な仲間集団の規範意識の低さ」を測定した11項目の α 係数は、.81であった。また、「仲間集団への同一視」の程度を測定した11項目の α 係数は、.89であった。いずれも信頼性は高かったため、尺度ごとに合計得点を項目数で除した値を算出して以降の分析に用いた。

③ 各変数の基本統計と性差の分析

各変数の平均値と標準偏差を調査対象者全体および男女別に算出し、表3に示した。性別を独立変数とする対応のない t 検定を行った結果、「自分恥」($t(229) = -1.32, n.s.$)に性差はみられなかったが、「他人恥」($t(134.90) = -7.42, p < .001$) および「仲間恥」($t(230) = -4.30, p <$

表2 恥意識の因子分析結果

項目	因子1 自分恥	因子2 仲間恥	因子3 他人恥
努力が足りなくて自分で立てた目標を達成できなかったとき	.782	.011	-.155
自分で決めたことを守れなかったとき	.697	.009	-.227
自分が正しいと思ったことができなかったとき	.694	-.190	.054
試験勉強をしようと決めていたのに怠ってしまったとき	.642	.253	-.108
親との約束を破ってしまったとき	.598	.078	-.057
ルールやマナーを守らない人に注意をしないとき	.572	.019	.024
親しい仲間（たち）との約束を破ってしまったとき	.551	.025	.093
困っているお年寄りを助けられないとき	.504	-.163	.317
大学のレポートの提出期限に遅れてしまったとき	.489	-.024	.018
過ちを犯したのに黙ってそれを隠しているとき	.461	-.039	.265
親しい仲間（たち）に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき	.411	.161	-.109
家で自分だけ勝手なことをして親に叱られたとき	.402	.153	.043
とめてはいけない場所に自転車を止めたとき	.351	.012	.255
親しい仲間（たち）と趣味や好みが合わなかったとき	.001	.778	-.078
親しい仲間（たち）と違うことをしたとき	-.108	.776	.073
親しい仲間（たち）が持っている流行の品を自分だけが持っていなかったとき	-.014	.763	.016
親しい仲間（たち）がやっていることを自分だけがしないとき	.027	.696	.028
親しい仲間（たち）の意見と自分の考えが一致しなかったとき	.108	.682	-.114
親しい仲間（たち）の話題に自分だけがついていけなかったとき	.126	.592	.045
親しい仲間（たち）に自分の失敗を笑われたとき	.021	.437	.045
親しい仲間（たち）ができることを自分だけができなかったとき	.122	.405	.232
着ている服や靴の種類が原因で高級レストランへの入店を断られたとき	-.076	.033	.726
上映中の映画館でクシャミをしまい、周囲の人から冷たい視線を浴びたとき	-.086	.088	.682
親しい仲間（たち）から自分のファッションを変な目で見られたとき	-.128	.025	.544
静かな図書館の中で自分の携帯電話の着信音が鳴ってしまったとき	-.010	-.016	.488
お祝いや式典で自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき	.018	-.029	.470
かんでいたガムを道ばたに捨てたとき	.323	-.057	.381
アルバイトの開始時間に遅れてしまったとき	.278	-.142	.378
ゼミナールの担当教授の前で自己紹介がうまくできなかったとき	-.046	.313	.345
α 係数	.86	.85	.74
因子寄与	6.82	3.92	2.11
因子間相関 因子1		.155	.341
因子2			.409

重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転

表3 各変数の基本統計および性差

変数	平均（標準偏差）			t 値
	全体	男性	女性	
【恥意識】				
自分恥	4.21(.69)	4.13(.68)	4.26(.70)	-1.32
他人恥	4.77(.72)	4.33(.75)	5.03(.56)	-7.42***
仲間恥	3.07(.85)	2.76(.83)	3.24(.81)	-4.30***
仲間集団の規範意識の低さ	3.29(.77)	3.20(.82)	3.34(.73)	-1.31
仲間集団への同一視	4.16(.81)	3.88(.92)	4.31(.71)	-3.68***
社会的逸脱行為に対する許容性	1.76(.50)	1.86(.56)	1.70(.45)	2.18*

* $p < .05$ *** $p < .001$

.001) に有意差があり、男子学生よりも女子学生のほうが高いことが示された。「仲間集団の規範意識の低さ」の性差は有意でなかった ($t(224) = -1.31, n.s.$)。また、「仲間集団への同一視」において性差が有意であり ($t(131.18) = -3.68, p < .001$)、男子学生よりも女子学生のほうが仲間集団への同一視の程度が高かった。一方、「社会的逸脱行為に対する許容性」については、男子学生のほうが女子学生よりも有意に高かった ($t(146.84) = 2.18, p < .05$)。

2. 変数間の相関分析

表4は、「自分恥」、「他人恥」、「仲間恥」と「仲間集団の規範意識の低さ」、「仲間集団への同一視」、「社会的逸脱行為に対する許容性」との間の相関関係を示したものである。「自分恥」は、「仲間集団への同一視」との間に有意な正の相関がみられ、「社会的逸脱行為に対する許容性」との間に有意な負の相関関係が認められた。「他人恥」においては、「仲間集団の規範意識の低さ」および「仲間集団への同一視」との間に有意な正の相関関係が認められ、「社会的逸脱行為に対する許容性」との間に有意な負の相関関係がみられた。また、「仲間恥」については、「仲間集団の規範意識の低さ」および「仲間集団への同一視」との間に有意な正の相関関係がみられたが、「社会的逸脱行為に対する許容性」との間には相関関係がみられなかった。一方、「仲間集団の規範意識の低さ」と「仲間集団への同一視」の程度の間には有意な正の相関関係がみられた。

3. 「社会的逸脱行為に対する許容性」に影響する要因（重回帰分析）

恥意識などの諸変数が「社会的逸脱行為に対する許容性」に与える影響を検討するために、「自分恥」、「他人恥」、「仲間恥」、「仲間集団の規範意識の低さ」、「仲間集団への同一視」を説明変数とし、「社会的逸脱行為に対する許容性」を基準変数とする強制投入法による重回帰分析を行った(表5)。

表5 「社会的逸脱行為に対する許容性」の重回帰分析

	社会的逸脱行為に対する許容性
自分恥	-.404***
他人恥	-.149*
仲間恥	.211**
仲間集団の規範意識の低さ	.128 ⁺
仲間集団への同一視	-.062
<i>N</i>	208
<i>F</i>	12.057***
<i>R</i> ²	.229

数値は、標準偏回帰係数

⁺ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

その結果、 $R^2 = .23$ ($F(5,208) = 12.06, p < .001$)であり、モデルは有意であった。標準偏回帰係数を見ると、「自分恥」と「他人恥」が有意な負の係数を示した。また、「仲間恥」が有意な正の係数を示した。なお、「仲間集団の規範意識の低さ」、「仲間集団への同一視」の標準偏回帰係数は、5%未満の水準で有意な値を示さなかった。

表4 変数間の相関関係

	他人恥	仲間恥	仲間集団の規範意識の低さ	仲間集団への同一視	社会的逸脱行為に対する許容性
自分恥	.368***	.240***	.059	.147*	-.404***
他人恥		.472***	.152*	.359***	-.202**
仲間恥			.186**	.380***	.036
仲間集団の規範意識の低さ				.324***	.090
仲間集団への同一視					-.046

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

4. 「仲間集団の規範意識の低さ」「仲間集団への同一視」「仲間恥」の関連性(偏相関分析)

本研究の仮説2(規範意識の低い仲間集団に同一視している者においては仲間恥が社会的逸脱行為に対して促進的な影響を及ぼす)を検証するために必要な分析として、まず、「仲間集団の規範意識の低さ」、「仲間集団への同一視」、「仲間恥」の3つの変数について、1つの変数を制御したうえで他の2つの変数のあいだの偏相関係数を全ての組み合わせで算出した(表6, 表7, 表8)。

その結果、「仲間集団への同一視」を制御変数として算出した「仲間集団の規範意識の低さ」と「仲間恥」のあいだの偏相関係数は、有意でなかった。一方、「仲間集団の規範意識の低さ」を制御変数として算出した「仲間集団への同一視」と「仲間恥」の偏相関係数は、有意であった。また、「仲間恥」を制御変数として算出した「仲間集団の規範意識の低さ」と「仲間集団への同一視」の偏相関係数も有意であった。有意であった2つの偏相関係数の符号はいずれも正であった。これらの結果から、3つの変数の間には「仲間集団の規範意識の低さ」→「仲間集団への同一視」→「仲間恥」という因果関係が存在する可能性が示唆される。この点をふまえて、次の5の分析を行った。

表6 「仲間集団の規範意識の低さ」と「仲間恥」の偏相関

制御変数		仲間集団の規範意識の低さ
仲間集団への同一視	仲間恥	.064

表7 「仲間集団への同一視」と「仲間恥」の偏相関

制御変数		仲間集団への同一視
仲間集団の規範意識の低さ	仲間恥	.349***

*** $p < .001$

表8 「仲間集団への同一視」と「仲間集団の規範意識の低さ」の偏相関

制御変数		仲間集団の規範意識の低さ
仲間恥	仲間集団への同一視	.289***

*** $p < .001$

5. 恥意識が社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響(パス解析)

次に、ここまでの分析結果から得られた諸変数

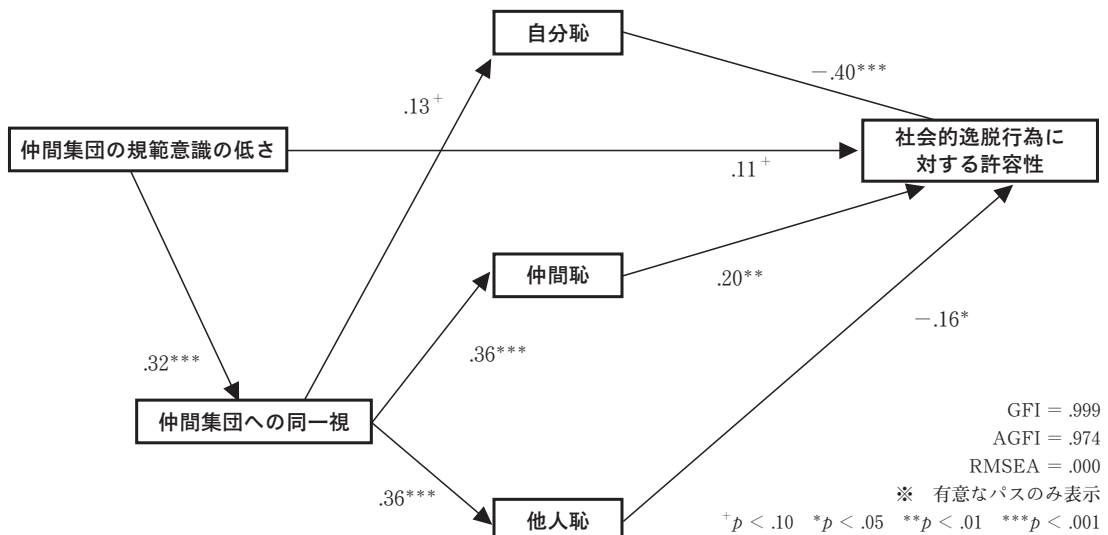


図1 仲間集団の規範意識, 集団同一視, 恥意識, 社会的逸脱行為に対する許容性のパス

の関係をふまえて、本研究の仮説である“自分恥と他人恥は社会的逸脱行為に対して抑制的に影響する（仮説1）”および“規範意識の低い仲間集団に同一視している者においては仲間恥が社会的逸脱行為に対して促進的な影響を及ぼすこと（仮説2）”を総合的に裏付ける因果モデルの検証をパス解析により行った。適合度指標の値から、データに適合した結果が得られたと言える。

標準化係数の正負と有意性は次の通りであった。まず、「自分恥」から「社会的逸脱行為に対する許容性」への負のパスおよび「他人恥」から「社会的逸脱行為に対する許容性」への負のパスが有意であった。また、「仲間恥」から社会的逸脱行為に対する許容性への正のパスが有意であった。加えて、「仲間集団の規範意識の低さ」から「仲間恥」へのパスは有意でないが、「仲間集団の規範意識の低さ」から「仲間集団への同一視」への正のパスと、「仲間集団への同一視」から「仲間恥」への正のパスが有意であった（図1）。

考 察

本研究では、大学生を対象とする質問紙調査を実施して、恥意識が社会的逸脱行為の促進・抑制の両面にわたって影響することを実証的に検討した。まず、恥意識の構造について再検討を行い、先行研究と同様に、3つの因子で構成されることを確認した。具体的には、自分の行動が自ら立てた目標や基準に合致しないときに生じる「自分恥」、そして、自分の行動が社会一般の常識やルールと一致しないときに生起する「他人恥」、さらに、自分の行動が身近な仲間集団と一致しないときに生じる「仲間恥」である。先行研究では、「自分恥」と「他人恥」が非行的態度を抑制すること、そして、「仲間恥」には非行的態度をむしろ促進する効果があることを示す結果が得られている。

これらの研究では、「仲間恥」が非行的態度を促す背景に、①仲間への同調は、思春期・青年期に特有の心性であること、そして、②青少年は社会規範からやや逸脱した行為を“英雄的”と考えがちで、それが仲間集団の行動基準となる場合が

あるという解釈を行っているが、実証的に裏付けられたものではなかった。

そこで、本研究ではこの問題を大学生における社会的逸脱行為に対する許容性に援用して検討し、自分恥と他人恥が社会的逸脱行為を抑制すること（仮説1）、そして、規範意識の低い仲間集団への同一視が仲間恥を高め、仲間恥が社会的逸脱行為に対して促進的な影響を及ぼすこと（仮説2）を検証した。その結果、2つの仮説を概ね支持する結果が得られた。本研究における調査の対象となった大学生が、規範意識の低い仲間集団に同一視する傾向があること、そして、規範意識の低い仲間と共有される価値観や行動基準のレベルは低いと考えられるので、仲間との不一致に起因する恥じらいの感情は、自らの行動をレベルの低い仲間基準へと突き動かしている可能性を示唆する知見が得られたと言える。

今後の課題として、恥意識尺度の標準化の手続きを進めるとともに、恥意識がさまざまな社会的態度に対してどのように促進的・抑制的な影響を与えるのかを明らかにすることが期待される。

文 献

- 松井 洋・中里至正・片山美由紀・中村 真・堀内勝夫 2005 非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究（勸社会安全研究財団 平成15年度研究助成報告書 43-56）。
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之 2010 親子関係と青少年の非行的態度IV 川村学園女子大学研究紀要 第21巻第1号 167-177。
- 中里至正・松井 洋 1999 日本の若者の弱点 毎日新聞社
- 中里至正・松井 洋 2003 日本の親の弱点 毎日新聞社
- 中里至正 他 2003 非行抑制要因に関する社会心理学的研究 平成13年度～平成14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究結果報告書
- 中里至正 他 2005 恥意識の行動抑制力に関する社会心理学的研究 平成15年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究結果報告書
- 中里至正・松井 洋 2007 「心のブレーキとしての恥意識」——問題の多い日本の若者たち——ブレーン出版